

はじめに

入院患者さんを担当したら初日のうちに必ず書くことになるのが指示簿です。そして、入院患者さんに何か起こった場合、最初に発動するのもまた指示簿です。患者さんの病態によっては管理目標や使用すべきでない薬剤があるため、もしも指示簿の記載が適切でないものだとしたら、患者さんに不利益を与え、スタッフにも混乱を招くことになってしまいます。しかし、この指示の出し方について体系的に習う機会は少なく、施設ごとに用意されているテンプレートや過去の指示を画一的に流用し続けるというのが現状となってしまっています。私自身、研修医の頃、自分の出した指示を見て、本当にこの指示でよいのだろうか、と悩んだことをよく覚えています。

そして、病棟での薬剤の使い方は、外来での薬剤の使い方と少し異なります。内服薬だけでなく点滴薬も選択肢に入ってきますし、もともと使用していた薬剤についても、入院の契機となる病態のせいで内服継続ができなくなったときにどうすべきか、という判断も求められます。不器用な私は、このようなちょっとした薬剤の使い方の違いにも戸惑ってしまい、頭を抱える日々でした。

そんな私の10年越しの悩みを解決するべく、先日、レジデントノート誌で「病棟指示と頻用薬の使い方」という特集を企画させていただきました。ありがたいことに、同特集は予想以上の反響をいただくことができました。それと同時に、「病棟診療に必要な知識をもっと拡充してほしい」というお声もいただきました。たしかに、病棟診療において指示簿を記載するのははじまりに過ぎません。すかさず、「持参薬はどうしましょう?」と確認事項は続きます。あるいは、「経管投与と指示をもらったけれども、経鼻胃管が入りません」といった小さなトラブルシューティングを求められることもあるでしょう。これらの事柄も、病棟指示にまつわる大事な知識ではあるものの、やはり、そのやり方を体系的に学ぶ機会は多くはありません。それらを習得するにあたり、それぞれの知識は散らばっており、網羅して習得できるまでには時間がかかったと記憶しています。

そこで、病棟指示に特化して、必要とされる知識と、その考え方・使い方を一冊にまとめたいと考えました。これまであまりフォーカスされてこなかったけれども、実臨床では避けては通れない知識を盛り込みました。読者の皆様にとって一生使える知識の詰め合わせとなることを期待しております。

2022年11月

著者を代表して
松原知康